空飛ぶ種子

～植物たちの繁殖戦略～

カ エ デ

１１月下旬、『凌樟寮』の玄関付近に生えているカエデの葉をひっくり返してみた。「あった。」赤く色づいた葉の裏側には、昆虫の羽のような**カエデの種子**がたくさん実っていた。

植物の最終目的は、子孫を残すこと。美しい紅葉はヒトの目を楽しませてくれるが、この時期、植物にとって重要なのは、種子を旅立たせ、**次世代に命をつなぐこと**なのである。その際、できるだけ遠くに種子を拡げることができれば、新しい場所での生存競争にチャレンジすることが可能となる。地面に縛られ、身動きができない植物。そんなイメージとは裏腹に、植物たちは、種子を拡げることで時空を旅するしたたかなチャレンジャーなのである。

アカマツ

今回は、**自然の力（空気抵抗、風など）**を利用し、空を飛ぶ種子のお話。上の写真にあるカエデの２枚羽は、風に吹かれて１枚ずつ、ばらばらに落ちてくる。栄養の詰まった膨らみのある側が重いので、重心に偏りが生じ、**高速回転**を始める。そのため、降下速度が遅くなり、うまく風に乗ると遠くまで運ばれることができるのだ。

マツの種子もカエデに似ている。いわゆる松ぼっくりのウロコの間から羽のついた種子が落ちてくる。一枚のウロコの裏側には２粒の種子ができている。開ききった松ぼっくりは、種子が飛び立った跡なのである。

アオギリ

アオギリの実は変わった形をしている。左の写真では、枯れたボート状の葉の縁に丸い種子が付いているように見える。しかし、これは葉ではなく実の皮が開き、ボートの形になったものだ。強い風が吹くと、数個の種子を乗せたボートは枝から離れ、種子の着いた重い側が回転の中心となって、くるくる回りながら降りてくる。うまく風に乗ることができれば、**回転しながらのウインドサーフィン**、といったところだろうか。

フタバガキ科の一種

谷 雅人氏提供

次は、大物の種子、**フタバガキ科**の一種。残念ながら、この樹木は日本には自生していない。アジアの熱帯雨林では、**高さ70mの樹冠**から全長１５ｃｍはある２枚の翼が舞い降りる。この標本は、佐高の卒業生の谷雅人先生（現栃農高）が今から約１０年前、宇都宮大学農学部の大学院時代にマレーシアのランビル国立公園で採集したものである。フタバガキ科は１００種類以上あり、エルニーニョの年（５，６年に一度）に一斉開花し、種子を降らせる。種子は**1km**くらい遠くに飛んでいくそうだ。

アルソミトラ・マクロカルパ

最後の種子は、**アルソミトラ・マクロカルパ**。別名ヒョウタンカズラ。熱帯アジア原産のウリ科のつる植物。**超軽量のグライダー**が１枚ずつ、滑空しながら降りてくる。航空力学的に理想的なその姿は、アメリカ空軍の『**ステルス爆撃機**』のモデルになったと言われている。（この種子は通販で購入。１枚500円。）